



第4分科会

第4分散会

I はじめに

基調は、分科会討議課題「人権確立をめざすまちづくり」を目指して、子どもの育ちを保障していく地域の教育力の充実、部落解放子ども会活動の継承と発展、市域住民が主体となって取り組む学習活動及び学習活動につながる啓発活動を柱に論議を深め、討議課題と自分との関係性を考えていくことを訴えた。続いて、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

一報告1ー⑭

部落差別事件とどう向き合ったか(熊本県人教)

2021年用地交渉での部落差別発言を発端に市に問われた「差別させた責任」を自問自答しながら差別のないまちづくりの実現に向けての取組に関する報告である。企業の差別発言の際に部落解放同盟熊本県連合会による市への聞き取りに対し「なんで」、「かわいそう」など、市職員の部落問題に対する他人事の意識が表面化した。市は「菊池市部落差別事象に関する対応書(マニュアル)改訂」、「部落差別対応会議の創設」、「管理職研修」及び「菊池市人権都市宣言」などの差別事件の防止及び対応を見直した。取組半ばではあるが今回の事件で加差別企業が差別問題の解決に取り組む会社に生まれ変わったように、人は変わることができるとの展望を広げながら差別のない明るいまちづくりに取り組んでいく。

一主な質疑と意見一

千葉 地域の部落意識が高まらず解決が難しい。役所内の内実があったと思うが、この差別事件を表面化できた理由、加害企業を変えた講演会の内容を教えてほしい。

報告者 地域に間違った情報が流れたため、正しい情報を伝えることが必要と判断したので、事件とその後の経過を含めて年4回広報誌等で市民に周知している。種々意見はあるが、事件を明るみにすることが差別をなくす取組みになるのではないかと考えている。講演会は「仲間を作る部落に生まれて」という題名で県人教会長が講話した。講話では、ム

ラの誇りと自分の差別心の自覚について語り、誰にも差別心があるからこそ差別をなくせる仲間になれると信じているといった話があった。企業とは今も良好な関係が続いている。

徳島県 75回大会となったが、なお同じことが繰り返されている。他人事を自分事に捉えなおすためには社会同和での取組みが課題である。

報告者 (長い取組の中で)部落差別をなくせなかったことは重たい(問題と受け止めている)。事件後4年経つが、部落差別をしないという職員もいる。部落差別を自分事に捉えるとはどういうことなのか、みんなで考える必要がある。部落差別事件がいくつか起きたが、市民に広報して部落差別をなくすための協力を呼び掛けるようにしている。もっと早くから取組むべきだったが、今から取組を始めていく。

三重県 報告者にとって差別させた責任とは？

報告者 差別者だけに責任を押し付けても何も解決しない。本事件の差別発言者は学校教育や親族から暗いイメージを植え付けられていた。そこにインターネット上の間違った情報が重なった。学校教育の敗北を感じた。自分が教員時代に育てた世代なので、差別させた責任との言葉には衝撃と責任を感じた。

鹿児島県 まず(先ほどのフロア発言の中に)社会同和という言葉があったので、実践報告協力者に言葉の整理をしてほしい。また、本事件に対する市長のスタンスを教えてほしい。

実践報告協力者 社会同和とは、社会教育における同和教育と整理させていただきます。

報告者 言葉の整理について、同和や部落の使用が過度に気にされている。啓発側の責任と思う。市長は「部落差別は許されない。これまで積み上げた人権教育が台無しになった。また一から人権教育をやり直さなければならない」との声明文を出した。また、市ホームページでも「インターネット上の部落差別はとてもしやせない」との反差別の意思を示した。市長は部落差別行為に対しきちんと向き合う姿勢をもっていると思う。

協力者 「同和」という切り取った言い方は、何度も攻撃することばで、被差別部落の人たちにとって「痛み」を伴う言葉であることを認識してほしい。

一報告2ー⑯

最近の部落研は楽しい(千葉県同教)

昨年度大会で報告した内容をもとに、この1年間における報告者の変容について報告である。ムラの青年の語りに自分の語りを返すことで反差別の仲間をつないできた。しかし、これまでの語り合いで相手を傷つけないように、あえて触れない言葉で返してきたことが差別(触れない差別)になることに気付いた。この気づきで、勤務先の生徒や部落研の仲間との語りを深められるようになった。今部落研に高校生がいない。困難を抱えながら周りが気付いていない子どもがいると考え

ている。この子どもたちを部落研の仲間になりたい。しかし、閉鎖的に行かないといけないのは語りの内容が秘匿性の高いことに起因しており、これを超えてなかまを増やしていくことが課題である。

一主な質疑と意見一

鹿児島県 報告者の肩書(同和教育推進教員)について、本県では同対法切れで児童生徒支援加配教員に変わり、生徒指導加配教員と混在している状況である。同推が残された背景について教えてほしい。

報告者 県内4校に配置されている。同対法がされたときにムラの働きにより残されたと思う。

千葉県 法の根拠がなくなったが、高校教員だけは県単加配のため部落差別を基軸としてさまざまな差別の解消のために立場が保障された。生徒の学習支援のほか地域で週1、2回活動することができている。この背景には、ムラの人々の努力や若者の部落差別がなくなることへの県教委の真摯な取組がある。なお、ムラのある小・中学校に人権教育担当者が配置され、同推と同じ研修を受けている。

協力者 宮崎県でも法切れにより小中学校に児童生徒学習指導支援加配教員という肩書で人権教育を担っている。高校は歴史上の取組のにより同和教育研究員という職名が付与されている。

島根県 青年が(周りが語らない中で)語り続けられた原動力や背景について教えてほしい。

報告者 親やムラの人たちの部落の誇りを聴いてきた。その中で自分が部落差別者と変わらない差別者であることを認識したため、今度は自分が(差別をなくすための行動で親たちに)返す番だと感じたからではないかと思っている。

熊本県 報告者と小中子ども解放会や小・中学生との関わり、及び県内高校間の連携について教えてほしい。

報告者 解放子ども会が地区では組織されておらず、ムラの人をとおして小中学生とつながりをつくるようにしている。宿題をみるなど小中学生と直接つながって部落研につなげられたらと思っている。しかし、いまの部落研に高校生がいない。地域内活動で子どもをつなげようとしているが、苦しんでいる子どもを把握できていないという大きな課題がある。高校間連携については、県内の同推配置校4校の担当が週1、2回集まり、ムラの家を訪問して得た情報や解放同盟役員との会合で得た情報を共有している。

大分県 触れない差別について、自分なりの配慮や壁がある。子どもたちとの語り合いでどう返したらいいのか教えてほしい。

福岡県 部落研で青年が語りやすいように気を付けていることや部落研の取決めなどがあれば教えてほしい。

鹿児島県 触れない差別について、相手の反応への怖さから無意識に触れないようにしてしまう。

柱を語る中でのどのような返しをしているのか教えてほしい。

報告者 部落研のルールは特にない。しかし、秘匿性の高い話をしているため、興味本位だけで参加する方にはクローズになる。これが課題でもある。(報告者自身)自分が関わりたいと思う人には、自分の壁を取り除いて自分を語るようにしている。また、相手の悩みに共感し自分事として悩むことでつながるようにしている。

徳島県 部落研での取組みは生徒指導にも共通していると感じる。生徒との心を開いた関わりを大切にしてほしいと思う。

三重県 自分を語ることで相手の痛みが返ってくることを恐れず語り合うからこそ、クローズでないとできない取組だと思う。被差別体験を語ってほしいと気軽に言われる人がいる。子どもは、自分や友だちに重ねて話を返してくれる。しかし、教員や大人は指導だと考えて返してこない。この痛みを知るからこそ、報告者の部落研での取組に敬意を表したい。

佐賀県 学校現場への(経験の)還元方法について教えてほしい。

報告者 週2回授業に出ているが、職員や生徒には自分の活動内容を隠さず話している。ムラの人との関わり合いを示すことで学校に還元している。

協力者 触れない差別とは触れられない関係だと思う。関係性の問題であって、報告者は部落研の中で関係性を築いている、またはその方法を学んでいるという報告であった。

一報告3-⑬

みんなで行くとちがうよね(鹿児島県同教)

まず「障碍」という表記について、「碍」は周りに岩がごろごろして歩きにくいという意味で戦前使用されていたが、戦後、被害の「害」に意図的に置き換えられたことを新聞コラムで知り障碍と表記したとの前置きがあった(以下、書を碍と敢えて表記する。)。障碍児をもつ保護者の会「こんべいとう」の、障碍のある子どもと障碍のない子どもが思いを語り交流できる空間を広めるための活動報告である。仲間との要請行動の中で障碍をもつ子どもの母親がつながり、自信をつけ積極的に障碍について発信するようになった。しかし、学校の分離教育により障碍のない子どもが障碍を正しく理解できず壁が生じているため、将来障碍児が社会から排除されないように、学校に対し障碍理解教育の推進を呼びかけている。

一主な質疑と意見一

佐賀県 社会の逆境に負けず障碍の子どもを育てていく親の強さを教えてもらった。部落差別を受けている人たちは、経済、職業差別によって社会から取り残され、学校に行けば除け者にされ教育の自由も奪われてきた。しかし、親たちは子どもが社会で役立つ子になってほしいという気持ちで子どもを見守っている。水平社宣言は、「わが特

殊部落民よ、団結せよ」と人々を奮い立たせ団結させた素晴らしさがある。(同じように)報告者の取組にも、障害者や親たちの(差別を跳ね返す)大きな原動力になっていると思う。

鹿児島県 特別支援教育や障害児への見方や理解が十分でないため、悩んでいる教員もいる。障害を理解しようとする意識の問題ではないかと思うが、個々で意識を高めていくことが難しい現状の中で、子どもが幸せに生きするために教員が当事者の話や意見を聴くことがとても重要と感じた。今回報告にあった保護者とのつながりを大切にしていきたいと思った。

報告者 障害者への暗いイメージが多い。暗いイメージでは(障害児(者))をかわいそうと思うだけで関わろうとできない。全校児童80人の学校に勤務した時、特別支援学級と普通学級の子どもどうしの営み(交流)が十分でなかったため、ある児童から特別支援学級はなぜあるのかと質問された。そこで、特別支援学級に通う障害児の母親になぜこの学校を選んだのか話しをしてもらったが、児童からはかわいそうという意見ばかりが出た。そのため、母親たちにうれしかったことを語ってもらうと児童は自分を振り返ることで特別支援学級の児童と関りをもつ仲間が変わってくれた。大人も同じだが、自分を振り返らなければ関りをもつようになれない。「お母さんも子どもたちもとても明るいですね。本当にしょうがい児の集りに来たのかなと思いました」と言ったボランティアの高校生の障害者に対するイメージは、メディアや社会によって作られている。障害児を産んだことに対する負い目や葛藤を乗り越えた母親の姿や強さが理解されていない(ので暗いイメージが続いてしまう)。

徳島県 (実体験から)他人に親切にすることの大切さを感じたことを思い出した。障害児やその親を大事にしてQOL(生活の質)を高める努力をしてきたことが実を結んできているように思う。

協力者 水平社宣言にもある人と人とのつながりの大切さを教えてくれた報告であった。

障害者を取り巻く現状が知られていないことが被差別当事者を苦しめている。被差別当事者が頑張らなければならない現状を打破するために、私たち一人ひとりが当事者意識を持ち、社会を変えていかなければならない。

一報告4-⑮

「はっと、ほっと、ぐっと」の取組から(奈良県人教)報告者は、教員生活の中で、親族や周囲の被差別部落地区に対するマイナスの言葉を聞いてきたが、被差別部落地区の母親の子どもへの精一杯の愛情に直接触れることで差別者であった自分を変える決意をした。この経験から、退職後は奈良県同和教育推進協議会で人権尊重のまちづくりを目指した人権マップ「はっと ぐっと ほっと」の作成とフィールドワークでのガイドボランティアに関

わるようになった。参加者がその地域に生きてきた人々の生活や生き様に共感し、差別性に気付き差別をなくす変容が起きることを期待している。

一主な質疑と意見一

福岡県 なかま研究部15人のメンバー構成について及びフィールドワークで子どもから出た質問と学校での事前学習の内容について分かる範囲で教えてほしい。

報告者 市職員、教員OBなど73の加盟団体に所属する年齢も様々な人たちで構成されている。子どもの質問の中には、燕会のいわれなどについての質問があった。参加される学校は学校の人権教育とフィールドワークをうまく連携させている。

徳島県 外部からの講演依頼について

報告者 フィールドワークに参加する方から事前に講演の依頼を受けるメンバーもいる。

千葉県 人権マップ「はっと ぐっと、ほっと」を授業などで使用することは可能か。また、西光万吉の水平社創立後の生涯を子どもにどのように伝えているか教えてほしい。

大分県 フィールドワークで小学生から出た質問を教えてほしい。

報告者 小学生の質問を具体的に覚えていないが、事前学習の積み重ねができていていると感じている。水平社創立後の西光万吉さんの生涯については「5万日の日延べ」、「学校逃亡闘争」及び「水平社創立」の地域教材を使って学習している。水平社を離れたあとの西光万吉さんの生涯については、それほど詳しくは伝えていない。

福岡県 若い人への継承や育成について教えてほしい。

報告者 自分の後継者を作っておかなければならない。しかし、後継者が豊富にいるわけではないのが実情である。引き継いでくれる後継者がいるか、心もとない状況である。若い人にどう引き継いでほしいのか、同じ課題を抱えている。

三重県 地区学習会や大山田反差別村民ネットワークに参加する高校生との関係を大切にして、今後高校生友の会を組織して後継者を育成していきたい。今できることから取り組んでいる。

徳島県 後継者になってくれる人と日頃から人間関係を構築しておくことが大切ではないか。

一報告5-⑰

大山田「ちくこん」30年を創りあげてきた仲間を思う(三重県人教)

大山田地区における官民協働による地区懇談会でのスタッフの仲間との絆が、報告者のちくこんにかける思いを盤石にしてくれている。報告者の反差別への原動力は、被差別体験、家族愛と身を挺して仲間を守りたいという決意である。

一主な質疑と意見一

千葉県 ムラの人たちとの出会いや部落差別をなくす主体者としての意識をもつに至った経験などについて教えてほしい。

報告者 家族や仲間を身を挺して守りたいという強い思いがある。

熊本県 (報告の中で言われた)社会同和教育と学校同和教育との繋がりやその役割について考えを聞かせてほしい。

報告者 義務教育修了後の子どもが社会同和教育に繋がっていない。つまり、社会同和教育の対象は成人であり、高校生への社会同和教育が抜け落ちている。なので、教育委員会の義務(学校)教育課と生涯(社会)学習課の連携が重要である。伊賀市教育委員会生涯学習課では、地区学習を巣立った高校生どうしを繋がらせておくための組織づくりに取り組んでいる。なお、現在Bさんが担当している。

徳島県 高校生の同和教育が疎かになっていないかとの指摘がある。高校教員時代に県教委主導で人権学習に取り組んでいた。したがって、高校も人権教育を疎かにしていないことを理解頂きたい。

協力者 市町行政における高校生への人権教育・啓発がおざなりになっている。行政に携わる者として課題を感じた。

(不明)報告者と M さんとの出会いについて教えてください。

報告者 M さんが教員に採用されて最初に赴任した中学校が、私の通っていた中学校だった。中学2年の教科担任と生徒として出合った。M さんは、人間として曲がったことが大嫌いな性格で、人間として大切なことを教えてくれた。目指す人間像として尊敬する存在で、いまも付き合いが続いている。M さんの「出過ぎた杭は打たれない」という言葉を大切に活動している。

宮崎県 教育公務員による不動産売買に係る土地差別事件をちくこんでどのように扱ったのか？

報告者 住民が討議すると、犯人捜しや被処分の内容に話が終始するため、こんな事件がありましたということではなく、県が令和5年に改正した三重県の差別を解消し、人権が尊重される三重をつくる条例の概要を説明し、改正から1、2年で条例に基づく県への救済申し立てをしなければならぬ差別事象が起きたと説明し、本事象の説明に入った。公務員は勤務で人権研修を十分に受けている。公務員でさえこんな差別事象を起こす。これは、他人事ではない。明日の自分かもしれない。このような事件を起こさないためには、研修が大事である。今後も心に残るような講師も呼んで参加を呼びかけるので参加してほしいと参加者の問題意識や当事者意識を高められるようにちくこんを進めた。

協力者 報告の最後にある「個人としての反差別への取組が、団体の有り様を決める。」というところ、反差別で繋がる報告者と仲間とのつながりに学ぶところがあつた。

Ⅲ 総括討論

報告者(鹿児島県) 学校における障碍理解教育推進に関する県及び県教委への陳情が、障碍児理解教育の推進にすり替えられ実現しなかった。(不明)父母の解放運動が解放活動の力になっている。中学生の時に部落差別を受けたことを父に言ったことで、解放運動が嫌になり運動から離れた。今年4月から支部の先輩に声を掛けてもらい4人運動に参加するようになった。支部規約を改正し、住所要件をなくしたことで被差別部落地区からの加入も可能とし、後継者の確保を図っている。しかし、解放運動に熱が冷めている地区住民も増えてきた。行政職員がこのような地域の状況をどう見ているのか教えてください。

報告者(宮崎県) 集会所にムラの方々会いに来てくれる。自分が期待されているように感じる。被差別部落地区の熱が冷めてきたというよりも、社会が諦めさせてきたと思う。外側からの評価は厳しい見方があるが、住民のつながりはあるのでつながりなおしていけたらとの思いはある。差別は差別者が作ってきたということをムラから発信していきたい。15年前に地区の部落解放誌を作成し、子ども向けにフィールドワークを企画した。地区住民の理解を得るため自宅を回ったが、運動を離れた人からも「頑張ってる」と協力的である。地区住民の思いを聴いていくこと、同じ思いを外に伝えていくことが解放運動の中で表にでる者の役割だと思う。地域の思いをどのように運動に繋げているのかを奈良と三重の報告者から聴きたい。

報告者(奈良県) 地区保護者と教員で教育懇談会があり、自分を鍛えてくれた当時の保護者が高齢になっても支部で活動している。後継者不足の問題がある。学校でも新しい教員が入ってこず、継承できていない。

報告者(三重県) 1995年地区外の人が大半を占める支部を発足させた。差別発言した議員への県連の事実確認と糾弾学習会で、糾弾する側にいた大山田の教員が支部の執行委員等になっている。**三重県** 自分が住む大山田では寝た子を起こすなという雰囲気があった。議員の差別発言は差別をなくそうと子どもを教える教員の自分にとって衝撃であった。糾弾学習会に参加して怒りを覚えたが、反差別を教える自分が大山田で(部落解放に)何もしてこなかったことを反省した。自分の立場を問われ、見て見ぬふりをしてきた自分に向き合い、支部運動や反差別村民ネットワークに関わっている。差別に黙っていない活動を仲間と進めている。

報告者(三重県) 支部員の高齢化は進んでいるが、次の世代に繋がっている。**三重県** 保護者や卒業した生徒と関わりを続けている。高校に進学しても、一緒に考えていく仲間になってくれている。学校、家庭、地域、行政が関わりながら活動できている。

報告者(千葉県) 周りから「まだやってんの」と言われ部落研の青年の熱が冷めてきているかも知れないが、青年とともに頑張っていく、活動を広げて

いかなければいけないと思っている。関われば差別の気持ちを湧きあがらせてくれる力が部落研の青年にはあると信じている。

(不明)熱量をもって仲間と一緒に頑張っていきたい。

千葉県 校内でいじめや差別発言が起きる前の日頃の学習といじめ等が起きた後の学習について教えてほしい。

報告者(三重県) 高校生の子どもが聴いた差別発言を先生に言ったが、先生は何をしたらいいか分からない。高校こそ小中学校から学ぶべきと思う。分からなければ小中学校の教員に聞いたらいいと思う。子どもが幸福になればいい。

報告者(鹿児島県) 子どもが一番関心をもつのは、教員が差別をしていた経験の語りであると思う。進学するにつれてこのような語りがなくなると感じる。小学校では学級づくり、集団づくりが大きい。しかし、高校に集団づくりという意識はないのではと感じる。学力偏重の教育で語りができなくなっているように思う。小学生の時に心を耕すことが大切だと思う。

三重県 自ら差別解消に向けて行動していかなければならないと改めて感じさせてもらった。

鹿児島県 地元に戻ったら差別の当事者意識が薄くなったように思う。当事者意識を高めていかなければならないと思った。守ったと思った相手から守られていた経験を思い出し、人のぬくもりを感じた原点を思い返した。人との関わりから始めていきたいと思わせてもらった。

鹿児島県 分かったふりをして取り繕う自分を感じさせてくれた支部長から「自分のことも語ってほしい」と言われた。人に語ってもらい自分を語らなかつたことを反省した。子どもの集団づくりのために自分を語りたい。

三重県 報告者(三重県)の生き方から差別をなくす同和教育をしていきたい。

三重県 自分を偽ってきた。差別をする自分を感じていたが、隠して差別をなくす立場ですと言ってきた。差別性を隠すために自分を語ってこなかつたと改めて感じている。4年前自分を語れるようになったのは、周りの支えがあったからだ。一生をかけて自分の差別性を断ち切っていくことが恩返しと感じている。

協力者 自分自身が差別を他人事と捉えていることに気付かなければ、自分事に落とし込めないと思う。本分散会では、人権教育と啓発の連携、展望、及びムラを隠さない生き方など、広がりのある多くの学びがあった。しかし、フィールドワークがムラの人に苦痛を感じさせている現実もある。いつまで被差別者に苦しい思いをさせなければならないのか、差別をなくすために一人ひとりにできることを考えていくことが必要ではないか？人権確立をめざすまちづくりのために、私たちが主体者となって取り組んでいくことを確認して分散会を終結する。